

十島村教育委員会だより 令和3年8月号

せわやがトカラ情報

南北160km
「心をつなぎ 気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号



写真提供：宝島小・中学校「8月4日 宮まいり」

8月・・・2つの東京オリンピックに思う

十島村教育長 有村孝一

令和3年7月28日。一年遅れとなりました第32回夏季オリンピック東京大会の開会式がありました。コロナウィルス感染症予防のため、無観客での開催となり、何もかも異例の中での実施となりました。しかし、選手の皆さんの入場行進も和やかで、ゲーム音楽ののりでの入場となりました。その中で57年前使われたオリンピックマーチも入っていました。その曲を聞いたことは感激でした。入場行進の時の選手の皆さんの笑顔が大変印象的でした。「多様性と調和」の理念のもと、最終聖火ランナーはテニスの大坂なおみ選手がつとめました。

さて時は昭和39年(1964年)10月10日土曜日。第18回夏季オリンピック東京大会の開会式の日です。小学校6年生の私は、学校が昼で終わると急いで家に帰り、白黒テレビの前にくぎ付けになりました。世にカラーテレビが出現したところで、「オリンピックをカラーで見よう」というキャッチコピーがテレビで毎日のように流れていたのを思い出します。トランペットのファンファーレの音色、オリンピックマーチによる行進、オリンピック東京大会賛歌など、耳元には、それぞれの音楽が今でも鮮明によみがえってきます。

最終聖火ランナーは早稲田大学の19歳の坂井義則さんでした。坂井さんは、昭和20年(1945年)8月6日原爆投下の日に、広島市に近い場所で生まれています。その若者が、聖火台までの182段の階段をさっそうと駆け上る姿は、日本復興の象徴でもありました。坂井さんが聖火台に点火したのを昨日のこのように鮮明に思い出します。

昭和15年(1940年)に一度は開催が決まっていた大会を、戦争のために開催を返上するということがありました。それから24年、待ちに待ったオリンピックの開催でした。国内はオリンピック景気に沸き、まさに戦後の復興を国の内外に知らしめた大会であったと思います。日本選手団の成績は、金メダル16個、銀メダル5個、銅メダル8個の合計29個のメダルを獲得して、これまでの最高を記録した大会でした。子どもながらに、男子体操、東洋の魔女と呼ばれたバレーボールの活躍やマラソンなど今でもはっきりと心に残っています。

ところで、今回のオリンピックは、17日間にわたって熱戦が繰り広げられました。8月8日に開会式があり、その日程に幕を下ろしました。コロナ禍の中で何とかやり切ったということではないかと思えます。奮闘した選手の皆さんには、温かい拍手を送りたいと思います。

成績は、金メダル27個、銀メダル14個、銅メダル17個の合計58個というこれまでのオリンピックの中で最多の数字を記録しました。8月24日からは、パラリンピックが始まります。オリンピック同様の感動を期待したいものです。

【気をつけてください】

オリンピックが終わっても、コロナ禍にあることに変わりはありません。8月17日には、鹿児島県の感染者が245人と過去最多を記録しました。そこで政府は、8月18日に鹿児島県を含む10県を「まん延防止等重点措置」の対象地域に追加することを決定しました。期間は8月20日から9月12日までです。8月19日には感染者が251人になり、過去最高を更新しました。これまで、鹿児島でも感染者の増加が日に日に多くなり、あちこちで新たなクラスターも発生しています。感染者は累計で6000人を超え、5日間で1000人増加しました。(8月20日現在)

村にコロナウィルスを絶対に入れてはなりません。拡大防止のために皆さんで村の対応に協力していただきたいと思えます。

8月は人権同和問題啓発月間です。

無観客となりましたが、今まさにパラリンピックが始まろうとしています。コロナ禍ではありましたが、東京オリンピックが開催され、アスリートの皆さんが、真剣に取り組む様子に、感動や多くの気づきを教えてくれたと感じています。

しかし、一方では、オリンピックでも生命・身体の安全に関わる事象や不当な差別などの人権侵害が存在していると話題になりました。また、いじめや児童虐待などにより子どもが命を落とすといった痛ましい事案が依然として後を絶たないのが現状です。9月1日の2学期のスタートは、全児童生徒が元気な表情をみせてくれることから始まります。SNSによる誹謗中傷や個人情報の漏えいなど、顔の見えないところで問題が生じています。これらの問題を解決するためにも、引き続き、私たち一人一人が自分の課題として理解を深めようとするのが大切です。「心のバリアフリー」について、考える機会にさせていただければと思います。

テレビスポットを始め、多くの啓発活動等が行われています。今後の放映も、ご覧ください。

鹿児島県人権啓発ポスター



【新聞掲載作品】

ぬけがらは おいといいて
そのままだよ
空へじゆうに
とんで行き
お天とさままで
お天とさままで
お天とさままで
であつたよ
じいじい
みんみん
あつみん
夏
悪石島小学校二年
赤さき こう太郎



子供のうた
六月三十日 南日本新聞掲載

令和3年7月2日 南日本新聞「若い目」掲載

先日、自動車工場をオンラインで見学させてもらいました。宝島には自動車工場や自動車会社はありません。福岡にある自動車工場とオンラインでつないで、実際の車作りについて教えていただきました。

車がどのような工程でつくられているのか、車のパーツの数や種類など初めて知ることばかりでした。一番驚いたのは、車の運転席の画面に切りかわり、まるで自分が運転席にいます。福岡とつながり、とても身近に感じられました。「遠くて近い」オンライン学習では、日頃経験できないことが可能になります。

十島村では、テレビ会議システムを使って各島の学校をつないで授業がたくさんあります。県内の学校と授業をすることも増えてきました。オンラインでつながって、学んだことをこれから生かしていきたいです。



「遠くが身近に」
宝島小六年 松下朔也

令和3年7月4日 南日本新聞「ひろば」掲載

「世界をつなぐICT」
宝島中学校二年 今里陽巳

僕は通う宝島小・中学校では毎学期、国際理解活動が行われます。お電話で話すと、英語が通じません。でも、英語を学ぶことで、自分と違う文化や考えを知ることができ、世界をよりよく理解できるようになります。

英語を学ぶことは、自分と違う文化や考えを知ることができ、世界をよりよく理解できるようになります。



十島村で学ぶ

中之島中学校 2年 羽生 深理

「大会に向けて」

僕は今、頑張っていることがあります。それは、部活動のバドミントンです。今年顧問の先生が変わり、練習メニューもだいぶ去年とは変わりました。今年最初の練習は、ストレッチや補強を行い、あまり分からずこの先、上手くやっていると心配になりました。しかし先生は、「楽しみながらやると良い。」と言っていました。その言葉を聞いて、楽しみながらやっていると苦しい場面もありましたが、乗り越えることができました。

7月に入り、練習が始まって3ヶ月がたちました。大会が近くなってきて、練習も大会に向けての練習になりました。中学校は主審もしなければならぬことを知り、スコアシートの書き方なども学びつつ、試合形式で練習を行いました。一勝でも勝てるように皆で支え合いながら、大会に向けて練習してきたので、いい結果が出せるように頑張りたいです。たとえ負けたとしても、僕にはまだ来年があるので、試合でも学んだことを学校に持ち帰り、一勝でも多く勝利できる自分に繋げたいと思います！悔いのないように頑張って、三年間の良い思い出として刻めるような日々をしたいです。



【悪石島小・中学校からのメッセージ】 教諭 赤崎 香苗

昨年の春、ドキドキしながら悪石島に上陸。“Welcome to Akuseki Island !!” 島民の方や生徒たちからのあたたかい歓迎にホッと胸をなで下ろしたのを今でも鮮明に覚えています。昨年は戸惑うことの多い一年間でしたが、2年目となる今年は、この島での生活にもだいぶ慣れ、自分なりの楽しみや喜びを見つけだしながら暮らせるようになってきました。島の方からの捕れたてのお魚の差し入れ(着々と体重増)、湯泊温泉での島の方とのふれ合い、ヘリポートからの満天の星空...等。悪石島に来てから、私の手元には priceless (お金では買えないとても大切な)ものが段々と増えてきました。時々薩摩川内で暮らしている家族のことを思い寂しくなることもあります。そんなある日、雑誌を読んでいると、ドイツの哲学者ニーチェの「汝の立つ所を深く掘れ。そこに泉あり。」という言葉に出会いました。自分に与えられた縁や人間関係、仕事、環境に価値を見出し、感謝する心を持ち続け、一生懸命頑張れば自分にしか到達できない泉が必ずある。この言葉は私が壁にぶつかったとき、いつも自分の背中を押してくれます。これからも、悪石島や十島村の子ども達の成長のために、自分には何ができるか、ということ問い続け、実践しながら、自分の泉を探っていきたいと思えます。



『教職員仲間であるあなた』への 私からのメッセージ
この島にきてつくづく感じるの「仲間の存在の大きさ」です。なかなかお会いすることはできませんが、共に頑張る先生方の存在を感じながら、これからも頑張っていきたいですね！